

第5回「政策推進作業部会」議事概要

日時 平成24年2月29日(水) 15:00~17:05
場所 北海道立道民活動センター 710会議室
出席者 委員:常本部長、阿部委員、大西委員、加藤委員、菊地委員、佐々木委員、佐藤委員、
篠田委員、本田委員、丸子委員
事務局:青木審議官、内閣参事官ほか
傍聴:法務省、文化庁、厚生労働省、国土交通省ほか

議事

1 国民理解を促進するための活動について

(1) NHK室蘭放送局 佐藤恭孝記者から説明

- ・ アイヌの方が、和人といわれる方が住む前から北海道に住んでいた、このことに関しては、かなりの日本人が理解していると思う。ただ、それ以上のこととなると、ほとんど知られていない。何となくは知っているけれども、歴史的な背景や現状となると、ほとんど知らない。そして、意外なことに、道内と道外とで、理解度の差は殆どない、という印象をもっている。
- ・ アイヌの古式舞踊を東京で披露した、そういう話題はメディアで取り上げやすいが、歴史的、社会的な問題となると、とたんに取り上げる頻度が低くなる。それはなぜかという、特にテレビについて言えることだが、活字よりも映像に引っ張られるというところが大きい。アイヌの古式舞踊が映像で流れると、すごくおもしろい。では、歴史的、社会的な問題をテレビでどう取り上げるかということになると、なかなか難しい。ある程度まとまった時間の番組とか、長期の企画でなければ取り上げにくい。また、何らかのきっかけがなければ取り上げにくい、ということもある。
- ・ 取材先までの移動時間、取材時間のことを考えると、取材先までの距離が近ければ近いほど放映しやすいという面があることは否めない。そういう意味で、アイヌが北海道を中心にいるということは、全国的な眼でみると不利といえれば不利といえる。北海道で、しかも札幌からは距離があるということは、取材する上でのハードルになってしまう。
また、アイヌについての話題を全国に向けて発信しようとするとき、それは北海道だけの問題だという言い方をされることがある。国民全体の問題だという認識があまりない。その要因の一つには、道外にどれくらいアイヌの方が住んでいるのか、などの基本的な情報が不足しているということがあるのではないかと。それを調べるが大変難しいことは承知しているが、「目立つ人」がいると露出度が増える、という面はあると思う。いろいろな分野で目立つ人がいればいるほど、その人を通じてアイヌが取り上げられる機会が増える。
また、何かを取り上げてもらおうとする際には、ネーミングを抽象的なものにせず、具体的なイメージが湧くようにする、ということも大きな要素だと思う。

主な意見

- ・ アイヌについて基本的なことは知られている、私もそれは感じてはいるが、関心のある方というのは、やはり特定の層に限られている面があるのではないかと。
- ・ 視聴者の側には、表面的なことだけではなく、歴史、事実を深く知りたい、という希望がある。そういう関心に応えるよう、深さ、質の面からのアプローチができないものか。
- ・ 以前、ある番組で、ウサギが鳴いている映像が流されて、これはすごい、見たことがない、と言われていた。しかし、アイヌ語でウサギは「イセポ」という。「イーッと鳴く小さいもの」という意味である。ウサギのネーミングそのものが、ウサギが鳴くところから成り立つ

ているのがアイヌ語である。同じ番組では、別の日にラッコの特集もやっていたが、ラッコはアイヌ文化ではとてもおもしろい動物である。

メディアの方がアイヌ文化を知ること、もっと面白く、もっと深い番組をつくることのできるのにもったいない、という思いがある。

- ・ メディアに取り上げてもらいやすいネーミングを提供することが必要だという御指摘は、大変重要ではないかと思う。
ただ、その一方で、公共放送には、視聴者の関心が十分に育っていない分野についても、関心を育てていく、掘り起こしていくという役割があるのではないかと思っている。
- ・ アイヌの問題が公共性の高いものであることは当然としても、全国各地には、その地域なりの公共性の高い問題がある。放送する側が、それらの中から何を選択するのかということは難しい問題だともいえ、アイヌに関わる側も工夫が必要なのだろうと思う。
- ・ アイヌ関連を担当する記者の方に集まっていただき、情報交換、意見交換する場を設けることができないだろうかと考えている。局の垣根を越えて、記者が集まる場、仕組みは存在しないのか。また、そういう場をつくらうとした場合、実現可能性はあるか。

意見に対する回答

- ・ 基本的なことからさらに踏み込もうとする方となると、ごく一部の層に限られる。そして、そういう能動的な意識を有する層が、北海道内に多いのかということ、そうでもないという印象。
- ・ アイヌ民族に対する基礎的な教養をもっているだけで、直接関係のないジャンルの報道をする際にも、ある種の厚みを出すことができると思う。
- ・ 本当に問題点を伝えようとするなら、ある程度時間をとって番組を制作していく必要がある、そのことは、公共放送に携わっている者であれば当然理解している。
- ・ 局の垣根を越えて記者が集まる場、仕組みについては聞いたことはないが、体系的な説明を聞くことができる、現地視察ができる、そういう場を設けると案内されれば、どこの社も参加すると思う。

(2) 大西雅之委員から説明

- ・ イランカラプテ。
私は、講演の機会があるときには、必ずこの言葉で始めている。御存知のように、「あなたの心にそっと触れさせてください」という意味である。この素晴らしいアイヌ民族の精神性を柱に、阿寒湖温泉のおもてなしを磨き上げていきたいと考えている。できれば、将来、北海道の玄関口である新千歳空港等で、ハワイの空港で我々が「アロハ」と迎えられるように、「イランカラプテ」という言葉でお客様をお迎えできないか、北海道のおもてなしの合い言葉にできないか、と考えている。
- ・ 我々は、長い間、北海道には歴史がない、文化がないと言われ続けてきた。
しかし、北海道にないのは弥生文化である、その一言で眼が覚めた。太古の縄文文化からアイヌ文化に繋がる脈々たる歴史の流れを学ぶにつれ、現代社会が見失ってきた自然への感謝や愛情、精神性溢れるアイヌの歴史と文化は、北海道、そして日本国の大いなる宝であるということ誇れるようになった。
- ・ 我々は、アイヌ文化に彩られた国際リゾートへの転換を進めている。3つの基幹プロジェクトがあるが、それら全てに、アイヌ文化、アイヌの方が大きな役割を果たしている。
アイヌ文化発信プロジェクトでは、ユネスコ世界無形文化遺産に選定されたアイヌ古式舞踊を中心として、創作舞踊、イオマンテの火祭り、千本たいまつ行列など、アイヌ文化を大々的

に発信する取組を行っている。また、今年の4月には、念願のアイヌシアター「イコロ」、イコロというのは宝物という意味だが、その宝物がオープンする。アイヌシアターができたことで、コタンのテンションはものすごく上がっている。観光客はもちろん、修学旅行や課外授業での活用も期待している。文部科学省の支援もいただきながら、開業に向けて一歩ずつ歩んできた。心より御礼申し上げる。

絶滅したエリアのまりも再生プロジェクトは、アイヌ民族の自然共生思想の賜である。絶滅したエリアにまりもを再生するプロジェクトが、環境省、釧路市の力を借りて、数年前からスタートしている。阿寒のマリモが世界のまりもの起源だということが調査で判明したこともあり、このエリアを一候補として、世界自然遺産の国内候補地を選定する検討会が再開されることになった。地域を挙げて、世界自然遺産の実現に向けて努力してまいりたい。

アウトドア基地化プロジェクトにおいては、アイヌのエコツアーガイドが活躍を始めている。国の支援をいただいて5人のガイドを養成してきたが、いよいよ卒業して阿寒で仕事を始める。

宿泊施設や観光船などにアイヌ文化を取り入れる際、間違った形で取り入れることのないよう、阿寒アイヌ知的所有権研究会というところが監修を行っている。また、阿寒アカデミーという事業を実施し、年2回の講義を住民の方に受けていただくことで、店づくり、まちづくりにアイヌ文化を取り入れる際に、深い理解の上で取り入れていただけるようにしている。

観光人材育成事業として、学生に座学とインターンシップを受けてもらう寄付講座を実施しており、アイヌコタンの方が積極的に指導に関わってくださっている。

- ・ 「まりも家族憲章」は、まちづくりの基本となっているものである。そのテーマは、阿寒に住む人も、阿寒を訪れる人も、みんな一つのまりも家族という、非常に愛に満ちた精神である。水があり空気がある、その当たり前前のごことに感謝する心を、まりも家族から世界に伝えていく、こうした宣言が盛り込まれている。
- ・ 今後の課題としては、4点ほど挙げられると思う。

1点目は、経済的な自立の難しさ。コタンを支えてきた従来型の民芸品が全く売れなくなってきた。ものづくりをやめ、大量生産のできる安易な全道一律仕入れ商品に移行してしまったことに主因があると思う。また、海外からのコピーなど非常に安価な物が出回っており、そういうものに押されてしまうという厳しい現実がある。個性あるものづくりを復活させることが鍵であると考えている。しっかりとした仕事をする若い人たちも徐々に育ってきており、そういう方たちの登用の場をつくっていきたくと考えている。

2点目は、全てのアイヌアートに携わる方がプロ意識を高めること。私はよく、もっとプロになろうと言っている。もっと自分たちのレベルを上げて、プロとして評価されるようになっていかなければならない。これは、職業として成功することだけではなくて、アイヌ民族の地位向上にも不可欠であると考えている。また、スターとなる方をつくっていくことは、アイヌ文化に無関心な層にアイヌ文化を浸透させる大きな力になると考えている。

3点目は、アイヌ民族の地域間の連携。特に、我々の地域では、道東に住むアイヌの方々の連携が不可欠である。各地域には、観光地、生産地などの役割分担があり、それらが一つの経済システムとして成り立つようにすることが重要と考えている。

4点目は、地元アイヌの方から是非伝えてくれと言われたことだが、しばしば差別に直面しているということ。差別には、いわれなき差別、間違えて起きた差別、知らずに起こした差別の3種類があり、これらの各々にしっかりとした対応策を見定めることが必要である。

- ・ 知的好奇心を体験的に満たすことができる観光現場は、和人とアイヌが相互に理解する上で、非常に素晴らしい場所である。その自覚を持って、根気強く地域づくりに取り組んでいきたい。

主な意見

- ・ 重要無形文化財に指定されているアイヌの古式舞踊が、果たして鑑賞に堪える舞踊として舞台にあがれるのか、という問題があると思う。つまり、プロ化としての古式舞踊と、神聖さを

重視した素朴な伝統を続けていくこと、この二面性をどう考えていくのかということ。

それから、阿寒であれば木彫が盛んだが、木彫を含めた工芸品の一番大きな問題は、工芸家が基本的な技術をどの程度会得しているかということ。伝統を残していくには、基礎的な勉強も必要である。それがアートに繋がっていく。その点に関して、若い工芸家の育成についてどう考えられているか。

- まち全体が一体になっているという印象。
もっとプロになろうという話があったが、まさしくそのとおりだと思う。工芸品の品評会を見ると、素晴らしいものをつくる方がいる。踊りも同じ。“見せる”のではなくて“見られる”踊りに育てていくことが、これからは必要になってくるのかと思っている。
- アイヌがアイヌの踊りを披露してお金を稼ぐことを批判された記憶を持っている。阿寒や白老のような観光基盤、商業基盤が存在しないところもある。アイヌがアイヌを差別する、そういうことを見たり聞いたりしたことはないか。
- コタンの方のモチベーションが高揚しているという話だが、その一方で、非常に忙しくなっている面もあるのではないかと思う。今後の伸び代をどのように考えているか。
- プロ意識を持った人、技量を持った人、そういう人が育ったときに、生業として成立するような社会の受け皿をつくらなければならない。それなしにプロを育てても、結局離れていってしまう。
北海道内の企業の代表者の方と工芸家の方々とを結びつけようと、私個人でも努力してはいるが、個人の試みだけではだめで、せつかくこのような国の動きがあるのであるから、どうやって展開していくのかということの本気で考えなければいけない。
- イコロについては、オープン当初は、非常にテンションが高く進んでいくのだろうと思うが、1年、2年経ったときにどうなっていくか、ということが問題だと思う。
担い手の育成は重要なことで、じっくりと考えていかなければならない。国立劇場などとの連携をしっかりと保って、踊り手、歌手を育成していくシステムを取り入れていってはどうか。
- 今後の課題は、阿寒で進められている様々な試みを、如何にして全道、全国に広げていくか、ということになろうかと思う。その場合に、地元の当事者の努力はいうまでもないことだが、自治体、とりわけ北海道の支援が大きなポイントになってくると思う。
- 先日、新千歳空港国際線ターミナルでアイヌの踊りの実演を行った。これは素晴らしい、と思った。玄関口である新千歳空港で行うこと、これが大切だと思う。

意見に対する回答

- 古式舞踊を御覧いただくお客様が徐々に減ってきた、このことは真摯に受け止めなければならない。古式舞踊と創作舞踊を組み合わせたものや、沖縄の芸術とアイヌの芸術を組み合わせたものを上演するなど、様々な試行を行っている。観光客に受け入れられやすいものを研究していく必要があると思うと同時に、森の中でたいまつ一本で演じる古式舞踊の素晴らしさも大切にしていきたい。
- 阿寒の観光の全盛期には、木彫りの熊やニポポ像が飛ぶように売れたが、今は買う人がおらず、商店を営む方は苦しんでいる。過去に売れた物が在庫として残っているために、業態転換もままならないという問題がある。若い工芸家は、携帯電話のケースカバーを木材で作り、素晴らしい彫刻を施すなど、新たな取組を始めている。業態転換をするために努力をしていかなければならない、そういう時期だと考えている

また、工芸家を育てていく上で、意欲を持って取り組める仕組みづくり、発表の機会の提供ということは、とても大切だと思う。

- ・ 「阿寒のアイヌの人たちは幸せだ。私たちは、地域で自分たちがアイヌだと言えない。」という話を聞くことはある。
沖縄では、自分たちの踊りや歌をどんどん発信してポジションを高めており、そのアプローチを学ぶべきだと思っている。
阿寒湖が恵まれているのは、温泉街の中にコタンがあること。千本たいまつなどは、コタンの方の無償奉仕に依るところが大きい。コタンの方の負担は大きいですが、嬉々としてやってくださる。そういうところで、我々のまちは成り立っている
- ・ コタンは、整備をすれば更に拡大できるので、阿寒で仕事をしたいという方がいれば、そういう方を受け入れることで、より大きなアイヌ文化の発信拠点にできれば、と思っている。
- ・ 空の玄関口である空港は、先住民の文化の発表、伝達の場所だと思う。新千歳空港にもそういうところが少しできたが、諸外国では、もっと大々的にPRしている。
- ・ アイヌ文化は知れば知るほどおもしろい。そのおもしろさを、もっと伝えたい。アイヌ文化の精神性などという難しい言葉で語らなくても、おもしろい、わくわくするようなことがいっぱいあるので、それを伝えていくような方策を講じていただきたいと思う。

2 民族共生の象徴となる空間の具体化について

事務局から説明

- ・ 昨年6月に取りまとめられた象徴空間作業部会報告を受けて、その具体化に向けた検討を進めているところ。今年度は、国土交通省において、象徴空間全体のイメージを描くための調査、検討を進めている。昨年8月に関係する分野の専門家からなる検討会を立ち上げ、象徴空間全体のイメージ、ポロト湖畔におけるゾーニング等を、多角的、分野横断的に検討してきた。本年3月に検討結果を取りまとめる予定である。24年度には、その調査成果を活用して、象徴空間の基本構想の策定に向けて検討を進めていきたい。その基本構想の下で、象徴空間の主要な要素である博物館、公園、その他の課題について、それぞれ検討を進めていきたいと考えている。
- ・ ゾーニングとしては、ポロト湖畔の南側の区域を、中央広場ゾーン、博物館ゾーン、体験・交流ゾーンの3つに分けることを考えている。中央広場ゾーンは、象徴空間来訪者の玄関口となる場所であり、ポロト湖や奥の自然休養林を一望できるロケーションのよさを活かして、来訪者を歓迎し、自然を体感してもらう役割を果たす。博物館ゾーンでは、アイヌの歴史、文化などを総合的・一体的な展示、調査研究、伝承者の人材育成などを行う。体験・交流ゾーンでは、伝統的なコタンの姿を再現し、アイヌ文化の伝承活動、体験学習活動、国内外の文化交流の場として活用していく。こういう考え方で現在整理がなされているところ。
- ・ アイヌの人骨の集約については、現在、文部科学省で、大学等におけるアイヌの人骨の保管状況等の調査を行っているところ。関係者の理解を得ながら、尊厳ある慰霊が可能となるよう、集約施設の在り方、慰霊への配慮の在り方等について、更に検討を深めていくことが必要。

主な意見

- ・ アイヌの歴史的背景は御存知のとおりで、それを土台として民族共生の象徴となる空間の検討がなされていると思う。視察に来られた官房長官、国土交通大臣、文部科学大臣も、口を揃えて早く進めるべきだとおっしゃっている。検討を早めてもらいたい。
- ・ 隣接しているポロトとポントはセットであり、ポントの活用が検討されることを願っている。

- ・ 以前、この象徴空間の中に、宿泊できるものがほしいということが言われていた経緯がある。全国のアイヌの拠り所となるものであるから、そういうことも望まれる。
- ・ この象徴空間に関わる作業と、作業部会との関係性が理解できていない。この象徴空間にこういう柱を、こういう要素を入れてほしい、という意見があった場合に、どうすればいいのか。
- ・ 政策推進作業部会の任務は、懇談会報告書で提言された政策のフォローアップ、及びそれに関連してアイヌ政策全般について検討することであり、象徴空間にかかる重要な問題についても、この場で検討されることになると思うが、象徴空間の個別具体的検討を含む個々の施策については、関係省庁やそれらが設置する検討会議で具体的、実務的な詰めをされるということもある。もちろん、その場合でも個々の検討の経過・結果については当部会に報告されるであろうし、それらについて必要に応じてこの場で検討し、確認していくということかと理解している。

3 その他

- ・ 有識者懇談会報告書の 11 ページに、アイヌ文化が「陋習」として禁止されていったとの記述がある。明治4年には、死者が出た場合にその家を焼いて転住すること、成人女性はその証しとして入墨をすること、男性が耳環をすることを禁止し、日本語を学ぶよう心がけるべきことを定めた布達が出された。それから5年経った明治9年には、風習の洗除という厳しい布達が出された。

我々はこの場でこうして一生懸命やっているし、やっていただいている、そのことは非常にありがたい。しかし、私は子どもの頃に辛い経験をしてきている。先生方も、役所の方も、是非このことを思い出していただきたい。

- ・ 私は、人権擁護委員をやらせてもらっているが、私の所属している支局では人権教室を開いており、アイヌの子どもも参加している。

命の大切さ、命って何だろう、生きるって何なのか。生きているものを殺さなければ私たちは生きていけない。

『いただきます』って何をいただくんですか」と尋ねると、手を挙げる子が一人いて、「命をいただくんです」と。そういう子ども達に会って、大変感謝し、感動している部分もある。

人は、生まれたとき、何も書かれていない白紙のように何も知らず、後の経験によって知識を得ていくもの。自由と平等、差別のない国へ。自分たちの先祖に誇りをもって、先祖の努力の上に、私たちが今あることを感謝したい。私はいつもそのように思っている。

- ・ 次回は3月23日（金）に東京都内で開催

(了)